

戦勝国と敗戦国の狭間に散った学徒兵 (五十嵐 修)

[おすすめしたい本]

『最後の学徒兵』

森口 豁／著

昭和25年4月7日、「戦死」。ある学徒兵の死をそう記した学友名簿を見た著者・もりぐちかつ森口豁が、なぜその学徒兵は戦後5年を経て戦死したのかという強い疑問を抱いた事から展開していくノンフィクションである。

私には父方の系図にシベリアで戦死した叔父にあたる人がいたことから、少年の頃から戦争に加え戦死した人に思いを寄せることが多かった。ある時、図書館で戦争に関する書籍を探していた時、この書と出会った。

この書で描かれているのは田口泰正^{たぐちやすまさ}。前述した学徒兵だ。彼は、太平洋戦争が敗戦へと向かう昭和18年12月、最後に徴兵された学徒兵の一人だった。配属先の沖縄・石垣島で上官の命令に従い、捕虜の米兵を斬首した。復員するも、この一件で昭和22年戦犯として逮捕収監された。裁判は戦争に勝った米国が大義を示す場であり、敗戦国側の被告田口には、抗弁むなく、死刑判決が下された。そして昭和25年4月、巣鴨プリズンで最後の死刑囚の一人として絞首台に立った。

この書に感銘を受けるのは、悲運な学徒兵の真実を突き止める著者の追求心だ。完成までに10年もの歳月をかけて調べ上げている。執念とさえいえる筆者の刻苦勉励さは、田口の「戦死」の無念をはらすためには必要だったとわかる。その調査を通じて得られた精緻な事実の提示が、田口という学徒兵を克明に描き出しているからだ。中でも、本書に収録されている彼が収監先で認めた家族宛ての手紙や短歌の数々から人柄と教養の深さを知ることができる。それ故、判決を前に減刑を求める千名にとどかん署名が記された嘆願書が提出された、という事実にも納得がいく。

刑が執行されたのは4月。人々が平和を享受し花見に興じる最中であつたという。この事実には胸が張り裂けた。最後に彼が遺した辞世の句でしめる。「ひとすちに世界平和を祈りつつ 円寂の地へいましゆくなり」是非、手にして彼の死を静かに考えてもらいたい。了

辞書には人の想いが宿っている (佐藤 佑樹)

[おすすめしたい本]

『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』

佐々木 健一／著

「鮭」を辞書で引いたら“美味”と書いてある。気になってこの風変わりな辞書『新明解国語辞典』（第四版）を最初から最後まで読んだ。全 1431 ページ、約 7 万 3 千語。5 カ月かけて読み終えると、ヒラメやホタテなど 25 項目に“美味”と書かれていることを知る。なぜ、このような書き方をするのか？

さらに「時点」の用例に「一月九日の時点では、その事実は判明しなかった」とあった。まるで小説だ。しかし辞書のどこを読んでも“その事実”の内容は書いていない。一月九日に何があった？

『新明解国語辞典』を作った山田忠雄氏は鬼籍に入っている。真相を確かめる術はない……とは思わず、諦めない人物がいた。『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』の著者である。

この本はノンフィクションである。著者は関係者へのインタビューを重ね、関連書籍を読み、真実に迫っていく。ミステリー小説を読んでいるように真相が気になりこの本をめくる手が止まらない。

元日以外は食事中も辞書作りをしていたケンボー氏。大学教授の職を辞し理想の辞書を追い求めた山田氏。

東京大学同期生の二人が作った『三省堂国語辞典』の発行部数は 13 年間で 561 万部に達した。しかし一月九日に”ある事件”が起き、彼らは決裂した。

辞書という本は、小説やエッセイに比べ無機質である。しかし、本は人によって作られている以上、人の思いが内在している。“鮭は美味”に込められた強い思い——それは、大きな大きな怒りだった——を知ったとき、『新明解国語辞典』が日本一売れる辞書になった理由を理解することができた。

「事実は小説より奇なり」をここまで見事に書き表した本を、私は他に知らない。

52 ヘルツのクジラたちへ (日置 蘭)

〔おすすめしたい本〕

『52 ヘルツのクジラたち』

町田 そのこ／著

クジラは通常 10 ヘルツから 39 ヘルツの声で鳴き、仲間たちとコミュニケーションを取る。だが、例外もいる。それが「52 ヘルツのクジラ」だ。このクジラは、通常のクジラより高い 52 ヘルツで鳴く。よって、他のクジラには、どれだけ叫んでもその声が聞こえない。だから、「世界一孤独なクジラ」と呼ばれている。『52 ヘルツのクジラたち』は、そんな孤独な叫び声を上げ続けている人たちの物語だ。

家族に搾取され、孤独に苦しみそれゆえ愛を欲する。しかし、その泣き叫ぶ声、嘆く声は誰にも届くことはない。それでも声を上げ続ける主人公の 52 ヘルツの声が私の心に痛いほど刺さった。広い世界でひとりぼっちで孤独や生き辛さを抱えながら、泥沼でもがき続けているような登場人物たちの姿に読んでいて私も苦しさを感じた。そんなリアルで生々しいとさえ思えるような辛さや悲しみが胸を締め付けると同時に私をこの物語に強く引き込んだ。

一方で、この本を読み終わった後、私の心に温かさが広がった。これはなんだろうと不思議に思ったが、少し経ってその正体に思い至った。それは希望だ。そして、これこそが私がこの本を紹介しようと思った理由である。主人公は孤独な世界で足掻き続け、52 ヘルツの声を聴いてくれる人、そして自分がその 52 ヘルツの声を受けとめたいと思う人と出会った。その 2 つの出会いを通して、主人公の気持ちは少しずつ成長していく。そんな主人公をみていたら、自分にもそのような存在、作中の言葉を借りると「魂の番」がいるのではないか、そう思えたのだ。

この世の中、誰しも大なり小なり生き辛さや苦しみを抱えていると思う。けれど、その中で、その辛さや苦しみを理解してくれる人がいる、自分が誰かの助けとなれる、そう思えるだけでこの世界が少し明るくなる。だからこそ、老若男女問わず、今を生きる人全てにこの本を薦めたい。

人間の弱さ (岡野 芽依)

〔おすすめしたい本〕

『告白』

湊 かなえ／著

今回、私が選んだ本は小説「告白」だ。作者・湊かなえのデビュー作であり、累計売上 300 万部を突破、映画化もされるなど、言わずもがなの評判作である。主人公の女性教師、森口裕子は自身の娘を殺した犯人に対する復讐を企てる。ある日のホームルーム、森口は「私の娘はこのクラスの生徒に殺された。」そう告白し辞職してしまう。この日を境に、事件に関係した生徒たちは森口によって追い詰められていく、といった内容。

物語は全六章に分けられており、それぞれ違う人物の視点で描かれている。読み進めていくと、語り手によって語られる内容に差異があり、それによってパズルのように事件が紐解かれていく。生々しい感情表現や思春期特有の毒々しさに恐怖を抱きながらも事件の全貌に対する好奇心でページをめくる手が止まらない、そんな名作だ。私はこの小説を読んで、人間の弱さを突きつけてくる作品だと感じた。森口の娘を殺害した渡辺は母親に認められなかった。共犯の下村は母親の行き過ぎた愛情が重荷だった。森口はただ娘と幸せに暮らしていたかった。生徒、その母親、そして教師。それぞれが抱く思いがあり、それを叶えるために誰かを傷つけてしまう。物語はその最たる例だが、私たちの生活のなかでも同じようなことが言えるだろう。人間である以上傷つけあうのは避けられないが、なるべく衝突を減らすにはどうすれば良いのだろう。この小説はそう考えるきっかけを与える役割があるのではないかと思う。気づきを得るだけで意識をすることができる。意識すると行動に影響する。作者は物語を通して、読み手にお互いの弱さを突き合うのではなく補い合ってほしいというメッセージを伝えたかったのではないかと考えた。

この小説は人と人が関わり合う時に大切なことを反面教師的に伝えている。自分のことで精一杯になりがちな学生にこそ読んでほしい一冊である。

夫と共に歩む (小川 まゆみ)

〔おすすめしたい本〕

『愛について 詩集』

若松 英輔／著

人は、大事な人を亡くした時にどうやって生きていくのだろうか。三年前に夫を見送り、地を這うような辛い日々を過ごした。何も分からないまま時間ばかりが過ぎていった。私には、彼との約束があった。「あなたが悲しんでばかりいては、僕も悲しい。あなたの笑顔が僕は好きだ。だから笑って。幸せな笑顔でいて。」と。彼が望んだように明るく生きていたかった。友だちとおしゃべりもした。美術館へも出かけた。でも、心の穴は埋まらない。何か忘れ物をしたような落ち着かない日々を過ごした。

時間を埋めるように図書館へ出かけ、次々と本を読んだ。そして、出会ったのが若松英輔氏の詩集「愛について」である。彼も最愛の人を亡くしていた。悲しみを抱えた読者に静かな言葉を送った。彼の言葉が胸に届く。「わたしは しあわせです いなくなって 痛いほどに 悲しまなくてはならない人に 出会えたのですから わたしは しあわせです いなくなっても あなたを こんなに近く 感じているのですから」「奇蹟は あるとおもう こんなに多くのひとがいるのに あなたに 会えて わたしは ほんとうの わたしに会えたから」

この詩は、心に小さな光を灯した。夫に出会い共に歩んだ人生だった。彼を愛し、愛をたくさんもらった。今も彼の気配の中で彼が選んだ好きなものに囲まれて暮らしている。悲しむことは無い。彼は、私の心の中にいていつも私を見ている。私は、若松氏の本を次々と読み、感謝さえ覚えるようになった。この本に出会えて本当に良かった。若松氏は、世の中の見えないもののの中に本物の価値があると言う。近所の人たちと交わす言葉、空気、光、私の周りは、美しいものにあふれている。この本を大事な人を失い、悲しみに沈んでいる人に捧げたい。彼らにも私のように心の中に住む大事な人と共に生きて欲しい。

できれば、私も側に行って手をつないで一緒に歩みたい。

北の大地に挑んだ身近な「プロジェクトX」 (兼平 義行)

[おすすめしたい本]

『大志を抱いた人々 岐阜県人の北海道開拓物語』岐阜県歴史資料保存協会／著

この夏に勤務先の社員旅行で北海道を訪れる機会を得ました。観光バスの車窓からの見える広大な畑や牧草の風景。考えてみれば江戸時代までは昼なお暗い樹林の原野です。これを切り拓いて豊饒の大地に変えた開拓の凄みを感じました。ガイドさんも開拓史について語り、カーリングで有名な北見市常呂町に岐阜の地名があることも説明されました。

この旅に触発されて、図書館に赴き司書の方の助力も借りて、本書を手に取りました。

本書は二十五年前の平成十年の刊行です。当時は北海道各地で入植百年を迎え歴史を振り返る機運が高まっていました。同時に岐阜県も飛騨美濃合併百二十年記念の一環として刊行した旨を当時の梶原知事が記しています。

明治初めの北海道はクラーク博士の「大志を抱け」が有名ですが、開拓の実情は過酷なものでした。光と影があります。

吉永小百合主演の映画『北の零年』でも描かれてましたが、開拓史は移住に至る苦しい事情、寒さやヒグマとの闘い、作付けの失敗。そして望郷の念は涙なしに語れません。

本書での英雄は岐阜県からの開拓者一人一人です。この英雄たちをより身近に感じさせるのが、どのページにも出てくる岐阜でよく聞く苗字と地名です。開拓に挑んだ成果の地に岐阜の地名を刻んだ彼らの想いは筆舌に尽くし難いものがあります。一方で本書は記録誌という性格から直接に心情を表現しない特徴があり、これがかえって読み手の心を揺さぶります。

膨大な資料を渉猟し、現地で開拓二世三世に傾聴した内容をあくまで淡々と筆を進めています。この客観性が身近な英雄たちの挑戦の志と偉業を静かに語るかのような役割を果たしています。

本書の表紙はラベンダー畑の紫で彩られています。北海道の有名な風景も岐阜にゆかりを持っています。北の爽やかな景色を身近に感じつつも、重みを感じられる一冊です。

女二人の癒し旅 （鈴木 勇治）

〔おすすめしたい本〕

『週末は、おくのほそ道。』

大橋 崇行／著

私は大垣で観光ガイドのボランティアをしています。大垣と言えば、大垣城と「おくの細道」だと思います。ガイドをするようになり、改めて「おくの細道」を読み返していた時に、この本に出会いました。

主人公は、松尾美穂と川谷空。芭蕉と曾良を連想させられます。二人は大垣の私立高校の同級生で、俳句甲子園に出場したことがあります。空は高校一年生の途中で急に転校していきました。現在は美穂が大垣の公立高校の国語教師、空は仙台で飲食関係の仕事をしています。仕事と同居している恋人とのことで疲れ果てていた美穂がSNSで空を見つけて十四年ぶりに連絡を取り、高校時代に行きたいと話していた「おくの細道」の旅に週末に現地集合して巡ることになります。

二人で巡ったのは、深川・日光・白川・松島・平泉・新潟・金沢・大垣の八カ所です。各地で芭蕉の句が紹介され、美穂による解説と実際に目にした現地の様子が描かれます。話が進むにしたがって、空の境遇が少しずつ判明して、転校して仙台に住むようになり、東北の大震災により生活が一変したことと、今回の旅の目的は会いたいと思ってる人に会えるかもしれないからと告白され、少しミステリじみた展開になります。旅のゴールは大垣の「奥の細道むすびの地記念館」ですが、記念館に向かう前に空は会いたかった人と出会うことができます。また、旅の行程と並行して美穂の学校での様子や私生活の変化が語られます。空ばかりではなく美穂も旅を通じて前向きに生きるようになっていきます。

この作品のもう一つの面白さは、グルメ本の要素です。深川で池波正太郎さんも通ったという「みや古」という店で深川鍋を食べるシーンがあり、その後も各地でその土地で知られている店の名物料理が出てきます。調べたら全部実在する地元の方に人気のある店でした。現地に行って食べたくてきます。

読んでいると心が癒される作品です。

明日が、ほんの少し明るく (村山 嘉章)

〔おすすめしたい本〕

『お探し物は図書室まで』

青山 美智子／著

もやもやとするものを感じ、図書室へ本を借りに行く。パソコン関係の本がなかなか見つからず、司書さんを探す。色白で大きい、白熊を思わせる女性の司書さんがいた。やりたいこと、知りたいことを伝え、本を五冊選んでくれた。「ワード&エクセル入門」といったものが四冊と、「ぐりとぐら」。

本書に登場する司書の小町さんは、不愛想だが聞き上手である。彼女は、多くを語らない。押しつけがましさを感じない。だからこそ、彼女のもとを訪ねたスーパーの販売員の朋香は、なんとなく五冊とも借りる。不思議なことに、気が付くと、パソコン関係の本ではなく、「ぐりとぐら」に夢中になっていく。

朋香だけでなく、私たちは誰でも、心のどこかに「なんとなく落ち込む」「このままでいいのか。」と、言葉にならないもやもやを抱えているのではないだろうか。それは、向き合うほどの問題でもなければ、ため息をつくほどでもない。一方で、もしもそれが晴れたなら、明日からの毎日が、ほんの少し明るくなる気がしてこないだろうか。

小町さんは、朋香の明日が、ほんの少し明るくなるよう、ほんの少し後押ししてくれる。それが「ぐりとぐら」なのだ。「ぐりとぐら」をきっかけに、言葉にならないもやもやと向き合えた朋香は、「ぐりとぐら」にも登場するカステラを食べた。食べながら、涙を滲ませ、明日への勇気を手にした。

ふと、私も「ぐりとぐら」を読んでみる。しかし、明日が明るくなる気配はない。カステラを食べても涙は出ない。ただ、本書を読み終えた私の目には、涙が滲んだ。本書からほんの少し勇気をもらい、明日への希望が湧いた。

朋香にとっての「ぐりとぐら」は、私にとっての「お探し物は図書室まで」だったのかもしれない。本書が、あなたにとっての「ぐりとぐら」が見つかるきっかけになり、あなたの明日が、ほんの少し明るくなることを願っている。



思春期の奇蹟 (青木 氷菜)

〔おすすめしたい本〕

『吹部！』

赤澤 竜也／著

これは、旅行に行った祖母と祖父が私のために買ってきてくれた本だ。吹奏楽部に入部したばかりの私と、全く楽器を演奏することができない主人公たちの姿が重なり、当時の私はとても勇気づけられた。

はじめはやる気のなかった吹奏楽部の部員が、1人の先生の力でそれぞれの弱さや悩みを乗り越えながら音楽と気持ちを一つにまとめていく。「思春期の生徒に金管や木管をやらせると、奇蹟が起きることがあるんだ。ある程度の才能があって、死ぬほど努力すると信じられないことが起こる。昨日まで石ころだったものが、気づいてみると宝石になっている。」この言葉で私はとても前向きな気持ちになった。もしかしたら、私も努力すれば石ころから宝石になれるかもしれない。

吹奏楽部は1人がチューニングの合っていない音を出すと全体の音が崩れてしまう。私は合奏の時うまく音が出せない時何度も注意されてしまうことがあり、厳しい指導に落ち込むことがしばしばあった。しかし、この本との出会いで、なぜ先生がそこを追求しているのか、先生が何を考えているのか少しわかるようになった。吹奏楽は単に楽器を吹いているわけではない。落ち込んでいる時やコンディションが悪い時は綺麗な音は出ない。しかもそれは努力に裏付けられている。吹奏楽は奥が深いのだ。

複雑な人間関係やそれぞれの悩みを乗り越えながら成長していく生徒たちの様子には、楽器の演奏を経験したことがある人にもそうでない人にもぐっとくるものがあるはずだ。この本を読むと、きっとあなたは私生活がもっと向上するように気持ちを切り替えられるはずだ。



不機嫌の椅子 (丹羽 禮音)

〔おすすめしたい本〕

『ジョゼと虎と魚たち』

田辺 聖子／著

私が勧めたい図書は『ジョゼと虎と魚たち』を代表作とする同名の恋愛短編集だ。この作品の代表作は近年、実写化・韓国リメイク・アニメ映画化などで有名になったもので、発表は1984年だ。これには9つの短編小説が収められており、どれもただの恋愛ものではなく、主に女性目線から描かれる男女間での駆け引きや別れのリアルな描写が魅力の1つである。

私は高校1年生で初めてこの短編集に出会い、田辺聖子の描くリアルな描写や詩的な表現に惹き込まれた。特に「荷造りはもう済ませて」の「不機嫌というものは、男と女が共に棲んでいる場合、ひとつつきりしかない椅子なのよ。どっちか先にそこへ座ってしまつては、あとは立っていなくちゃいけない椅子取り遊び。自分が座ってはいけないのよ」という文に衝撃を受けた。男女間においても、全ての人間関係においても一人が機嫌を損ねたら他の人は配慮し、耐えるしかない。もう一人も加えて不機嫌になれば、その関係は崩壊するしか他ない。思春期特有の人間関係のこじれに悩まされていた私は、それまでの謎が可視化された感覚にひどく納得した。この田辺聖子の生み出したフレーズにより、私はこれまでの人間関係における不安感が払拭されたように感じ、考えを一新してこれまでの関係を見直し、新構築に前向きになることができた。また、どの短編もはっきりとした結末や男女間の行く先はかかれておらず、あくまでも人間関係のこじれの部分や駆け引きを題材としているため、先を考察してみるのもこの物語の良さだと感じる。読者の年代や経験の違いによっても結末が変わる面白さがある。

『ジョゼと虎と魚たち』は思春期特有の違和感に悩まされている女の子にぜひ読んで欲しい。私のように、これまでの謎を認識するきっかけや、不安を取り除くための手助けとなることだろう。